みめぐみの

第15部

みめぐみの

第15部

大谷光道著

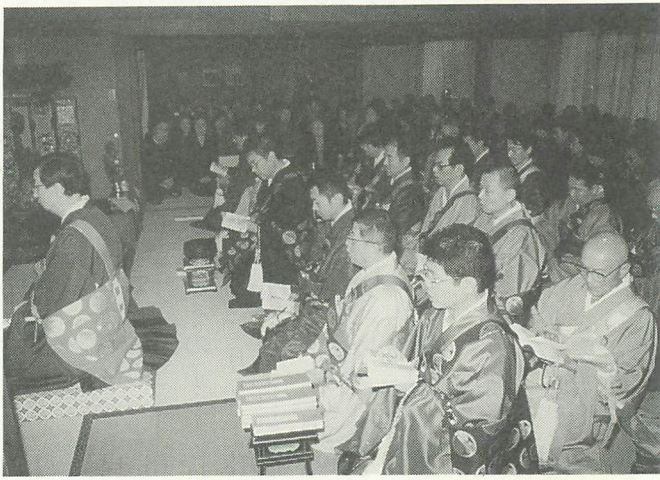
目次

江戸時代からの雛人形……2
頑張る……5
精　進……7
「精進」の原動力……8
優先順位……11
うちの子、よその子……14
あれから三十三年……15
うちの子、よその子……17
「一子地」のおこり……18
浄土真宗では？……21
・・・けり……23
お母ちゃん！……25
読者の頁……29
あとがき……31

江戸時代からの雛人形

このたびは母・歌徳院釈如智禅尼（かとくいんしゃくにょちぜんに）の十三回忌法要のために、皆様方には遠路ご多用の中をようこそご参詣くださいました。また、ご都合でお参りになれなかった方も、そしていろいろとお手伝い、お世話を願った方々、皆様方の物・心・身にわたるお力添えを得て、無事に法要を勤めることができる運びとなり、誠にありがとうございました。

早いもので、母が亡くなってからもう十二年です。すでにほとんどの方が



ご覧いただいたかと思いますが、今回は母の遺品を展示することにしました。他にもお目にかけたいものもありましたが、場所の関係もあって止むを得ぬことです。しかしこの法要の準備のために多くの方々が長時間にわたってご奉仕いただいたお蔭で、皆さんにご満足いただけるものになったのではないかと自負しております。ちなみに、展示をご覧いただいた二階の部屋――ちょうどこの真上――は、母の自室であったことをご紹介しておきます。

ご承知のように母は東京の生まれ（明治三十九年）ですが、父との婚約が決まり――昔は早かったんですね――京都の府一（ふいち）（京都府立第一高等女学校）に入学しました。今でいうと中学入学の年齢です。学校へ通うのに初めは借家住いだったそうですが、その年の二学期からはご門徒の有力者が母のために購入してくださった聖護院（しょうごいん）の家――現在私が住んでいます――に住むようになりました。通学は人力車だったそうで、また、江戸っ子らしく今でも繁盛している近くの蕎麦屋（そばや）さんに時々出前を頼んだとか、当時の光景が偲

ばれます。

今回ご覧いただいたのは、府一時代の作品（同窓会所蔵）や後年の和歌や絵、著作、皇室からの恩賜の品、輿入れ道具などで、中には私共も今回初めて目にするものもあります。

展示した品々の中で私として印象的なものの一つは、学校の休みに東京の実家に帰った時の作文で、汽車の中での「まだか、まだか。」の気持ちを綴ったものです。わずか十二歳で親から離れて独り京都に住んだ頃の気持ちは、この作文を見るまで、生前の母からは聞いたことはありませんでした。

ここでその全てについてご説明する時間はありませんが、母のお雛様の右隣に当家歴代の裏方のお雛様がお目に止まったのではないでしょうか。今から二百年以上も前からのお人形も、何代にもわたって伝わっております。これはかつて母に伝えられ、そして家内に、さらに次の代へと引き継がれていくことになります。あのお雛様と向かい合うと歴史の風雪が伝わってきて、

「頑張らんといかんな。」という気持ちになります。誰よりもそれを強く思うのは家内ではないでしょうか。

頑張る

こういうと、「頑張るというのは我を張るということやからいかんのや。精進すると言わんといかん。」と、何年も前から「頑張る」に異論を唱える方が、ここにおられます。

しかし私は、「我」という字などどこにもないのに何で「我を張ることになる」なんてやいやい

府一時代の智子前裏方

仰るのかと思い、それより元気があって良い言葉だし日常的にご挨拶のようにも使われているしと思ってこの異論のことを気にせず、「頑張る」という言葉を自分でも当たり前に使っておりました。

ところが、最近「念のため」と思って辞書を開いてみました。

「頑張る」は当て字。「我(が)に張る」または「眼(がん)張る」の転という。

(1) 他の意見を押しのけて、強く自分の意見を押し通す。我をはる。

(2) 苦しさに負けずに努力する。

(3) ある場所に座を占めて、少しも動こうとしない。(『大辞林』)

とあって驚き、もっと早く辞書を引いておけばよかった、と反省する始末です。異論の主に、ここでお詫びとお礼を申し上げます(笑)。

まさに「頑張る」の本来の意味はご指摘の通り(1)で、(2)のような日常的に使っている意味も後から加わってきたのでしょう。しかしよく考えるとやはり、邪魔物を肘(ひじ)でかきわけて、そんな無理をして、「我を通す」というイメ

ージが出てきますね。

精　進

もう一つの「精進といわんといかんのや。」ということから、ＮＨＫの毎朝の連続ドラマ『ほんまもん』が思い出されます。皆さんもよくご覧になっているんじゃないですか。二、三日前は尼寺の庵主（あんじゅ）さんが精進料理を若い主人公に教えているところで、「六波羅蜜（ろくはらみつ）」について説き聞かせている場面でしたね。テレビの番組で「六波羅蜜」（波羅蜜＝梵語・パーラミター（pāramitā）の当て字、「悟りにいたる行」の意）というような言葉が出ることはめったにありません。私がお話ししていると、時々「言葉が難しい」ということで――じゃないかな――顔をしかめておられる方がおいでになります。「六波羅蜜」のような言葉でもドラマだと抵抗がないんでしょうね（笑）。

あの庵主さんの話は、菩薩の実践すべき修行である六波羅蜜を一つひとつ

（布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧）説明してましたね。話の結論は、六波羅蜜の第四番目である「精進」が仏道の極意であるということでした。「精進」とは「精魂をこめてひたすら進むこと」ですが、本来は「俗縁を絶って潔斎し、出家入道したのちはひたすら宗教的生活の一途に生きることをいう（『岩波仏教辞典』）」とあります。他の五つの波羅蜜（修行）と同様――少なくとも意識的には――何もそれらしい修行も行っていない私たち浄土真宗の教えをいただく者は、本来の「精進」とは無縁なのでしょうか。

「精進」の原動力

いつもお話しするように、浄土真宗では「私たちは根底から支えてくださる力によって支えられ護られている。」のですから、何も頑張らなくても――無理をしなくても――精進させていただけるのです。繰り返しますが「阿弥陀様の本願力によって――後ろからの支えによって――自分で頑張ら

なくても精進できる。」のです。

法蔵菩薩がはかり知れぬほど長い間（兆載永劫）のご修行によって成仏なさったのが阿弥陀様であることは、折に触れてお話ししてきました。法蔵菩薩のご修行はもちろん六波羅蜜のみではありませんが、本願を起こし修行をされた動機は、

「一切の衆生（生あるもの）は久遠のむかしから今日にいたるまで、煩悩・罪悪にけがされて清浄な心はなく、いつわり・へつらいにみちて真実の心はない。であるから、阿弥陀如来（法蔵菩薩）は、一切の苦しみ悩んでいる衆生をあわれみ……」（親鸞聖人御作『教行信証・信の巻』）

であり、そのご修行のありさまは、

「言動と意思（身口意の三業）において、一瞬の間も清浄でなかったことはなく、真実の心でなかったことはない。」（同右）

と述べられております。

まさにこれは精進の極みです。真実の心を起こすことのできない凡夫のために、一瞬の間も煩悩・罪悪にけがされないご修行をはかり知れぬほどの長い間積み重ねてくださったのです。さらに、このようにして成就（完成）した六字のお名号（南無阿弥陀仏）を私たち煩悩に汚れた衆生に与えてくださるのです。ですからこのお名号を称える（念仏）私たちには――まことに虫のいい話ですが――「精進」も備わることになるのです。

智子前裏方の雛人形と。
右は代々裏方の雛人形、左端は姉の大賀美都子さん

ただ、ここで誤解のないようにしてください。阿弥陀様に任せておけば、ただ念仏さえしていれば、何も努力しなくても事が成就するのだ、と言っているのではありません。「真剣に事に当たっている私を照らし護ってくださっている阿弥陀様の支えに手を合わせている私」に気づくということです。念仏はこの時の念仏です。

優先順位

私自身のことを引き合いに出すのもなんですが、八年余り前に先代から当家を受け継いだ頃は、とにかく頑張っていました。いつも「あれもせないかん。」「これもしておかんといかん。」という思いで何から手をつけたらいいか落ち着かず、がむしゃらですべてに無理をしておりました。

ところが徐々にやるべきことの優先順位がつけられ、仕事の段取りができるようになってきました。そのことによってパニックから解放され、順々に

一つひとつの事柄を集中してこなしていけるようになってきました。

これはお念仏のご利益で、優先順位が見えてくるんですね。そしてその仕事に自然に精魂がこもってくる。つまり精進させてもらえる。

それでは、優先順位が下のほうになった事柄はどうなるかといえば、後回しになったり、悪く言えば「手を抜く」（笑）ということになります。一日は二十四時間です。二十六時間はありません。その中でしか——有限の中でしか——我々は生活することができない。無理をしてそれが重なるとかならず体を壊す。体を壊すと、それまでは他人の役に立っていても、今度は逆に他人に迷惑をかけることになる。ですからどこかで手を抜かないと、生きていけません。手を抜くというと悪く聞こえるので、「優先順位の付け方を大切にする」ということです。

私たちがお雛様と向き合うことによって、お雛様がそのまま阿弥陀様に見

えてまいります。そこで、頑張らないかんという気持ちもやがて自然に精進できるような気持ちにさせていただける、そういう気がいたしました。今日はうちのお雛様の例でお話ししましたが、もちろん皆様のお宅でも同じような場面がおありだと思います。

今日のお話は「頑張る」の悪口ばかりになってしまいましたが、「頑張る」は「自分ひとりだけでもやり通す、苦境を一人で持ちこたえて見せる」という強い意志表示であり、その意味ではもちろん尊いことです。ただ大事なことは、頑張り通した後に「私一人じゃなかった。みんなが助けてくれていたんだ。一番深いところに阿弥陀様の手のひらがあったのだ。」と精進できたことに気づくとき、真のお念仏が口からあふれて出てくるはずだ、ということです。

うちの子、よその子

昨日に続きご多用のところを当法要にご参詣いただき、誠にありがとうございました。昨日のお逮夜から只今のお日中まで三座にわたるお勤めを無事に終えることができました。

そして今日は母の葬儀の時に讃仰歌（さんぎょうか）を合唱していただいた大谷楽苑（がくえん）の方々も大勢お参りくださいました。父の葬儀の時にも歌っていただきましたので、今日はそれ以来のことになります。両親のこととなると、大谷楽苑を抜きには語れません。大谷光道という名前でご案内したので、楽苑の方々は、あるいは「そんちゃん」と言わないとわからなかったかも知れません。今私の顔

を見て、「なんや、そんちゃんか。」と思われているでしょう。当時私はそんちゃんと呼ばれておりました。これは固有名詞ではなく、兄とか姉も同じようにそんちゃんと呼ばれていたのですが、私が末っ子なのでたまたま最後まで、あるいは今日までその愛称を一身にいただくことになってしまいました。

あれから三十三年

母が亡くなって満十二年になりますが、昨日ふとこんなことを思い出しました。ちょうど三十三年前、私が車を

讃仰歌の合唱（「大谷楽苑」と「ともしびの会」）

運転していて起こした事故のことです。ひょっとすると去年の十二月が私の三十三回忌になっていたはずです（大笑）。

十二月の下旬で、朝四時半頃でした。さっきからまだお見受けしていませんが、その時に一緒に私の横に乗っていた方もお参りくださっていると思います。残念ながら男性です（笑）。もう三十三年も経つなあ、と思いました。

その事故の時に、明け方、私たちが救急車で運び込まれた病院から「頭と顔面をやられております。」という電話が入って、みんなびっくりしてくれたようです。母が真っ先に駆けつけてくれたことを覚えております。

後で聞いたところでは、父とか兄とかはですね、一応飛び起きてくれたそうですが、「まあ、母からの電話を聞いてからにしよう。」ということにしたそうです。この電話で心配もし、怖がりもしてくれたのですが、そういうときは男というのは――それ以外もですが――あまり役に立ちません（笑）。まあ、中には役に立つ方もおいでになるかもしれませんが……。実を言うと、

この電話は嘘とまでは言えないものの、大げさであったとは言えます。車から放り出されて全身打撲だったので、寝返りもできず体中が痛くて数日間病院で唸ってはいましたが、お蔭様で「頭と顔面」というのは、おでこの生え際と目尻を少し切ったのがそれでしょう（笑）。同乗していた男性は、お蔭で――と言ってはなんですが――私より軽傷でした。

うちの子、よその子

母親というのは――ここにおいでになる方の半分以上は母親だと思います――我が子のこととなると一生懸命で、何も私の母親が特例ではありません。皆様方、同じだろうと思います。とにかく、母親が――まあ父親もそうなんですが――子供を愛することは大変なもので、言葉では語りつくせるものではありません。

母の十三回忌を機に母の思い出の一つとして、三十数年前に私が起こした

事故の時の母を思い出したわけです。この機会に今日は、この先をもう少し考えてみましょう。

一般に自分の子供は大切にするんだけれども、よその子供はあまり大切にいたしません。自分の子供を大切にすること自体はいいことですが、よその子供をあまり大切にしないのは決していいこととは言えませんね。そこで、よその子供も、そしてどんな人たちに対しても、さらにあらゆる生きとし生けるもの（衆生）に対しても、自分の子供と同じように大切にできる、そういう心境になる、なれるということが大切だと言えます。

そうは言っても、これは容易なことではありません。これこそ慈悲の徳を備えた仏の境地です。また、菩薩でもずっと上の位に到達するとこのような境地になれるとされるのですが、この位のことを「一子地（いっしぢ）」と言います。

「一子地」のおこり

一子地の言葉の由来は、お釈迦様に一人だけ男の子がおいでになったことによっています。ラーフラ（Rāhula）というお名前で、お釈迦様が出家される前に迦毘羅国（Kapilavastu）の王子であった時、耶輸陀羅（Yaśodharā）妃に宿ったお子様です。お釈迦様が覚りを開かれてお城に一度帰られたときに出家し、智慧第一の舎利弗について修行して密行（細かな点まで戒律を守ること）第一と称された方で、後に十大弟子の一人となられました。

お釈迦様が我が子の誕生を聞いて「ラーフラが生まれた。」と仰ったことがその名の由来で、ラーフラとは障碍、障り、つまり「さまたげ」という意味です。子供という執着の種が一つ増えて、修行の邪魔になると仰ったわけですね。二人以上子供があれば愛情が分散されるというわけでもないのですが、一人っ子の場合は特に子供に対する執着が強くなるということと、さらにこの思いがすべての衆生に及ぶとすればそれがそのまま仏の境地になることから、一子地という言葉が生まれたわけです。「衆生を見ること羅睺羅

覚りを開いた後、村から村へ説法の旅をする父（釈尊）のもとへ行き、弟子となるラーフラ。

（ラーフラ）のごとし」（『大般涅槃経（梵行品）』）という経文に、明快に示されています。

仏教は本来、執着を嫌い否定します。しかし執着という言葉の意味がそうであるように、特定のものに対する愛だから執着というのであって、一子地というすべての衆生に対する執着はむしろ執着を否定したところ、超えたところに生まれる境地ですから、かえって執着ではないことになります。

羅睺羅とはラーフラに漢字を当てたものですが、「ああ、あれか。」と思われるでしょう。『阿弥陀経』の初めのほうでお釈迦様のお弟子達の名前が並んでいるところに出てきますね。

浄土真宗では？

上位の菩薩が到達できるという一子地の境地について、浄土真宗ではどう教えられているのでしょうか。

平等心をうるときを　一子地となづけたり
一子地は仏性なり　安養にいたりてさとるべし

（親鸞聖人御作『浄土和讃』）

平等心＝すべてのものをわけへだてなく愛する慈悲心／仏性＝仏としての本性／安養＝浄土、極楽

ここにあるように、私たちは信心をいただきやがてお浄土に行って成仏すると、この位に至ることができます。

ところが今この世ではどうでしょうか。一子地とは平等心と同じことで、すべてのものをわけへだてなく扱うことができれば何も言うことはありません。先ほどの我が子とよその子とのわけへだてもそうですが、愛し合う相手もあれば憎み合う相手もある、日常のドロドロした毎日。最も身近な三度の食事を見ても、殺生せずには成り立ちません。あらゆる生き物をわが一人子のように大切にする「一子地」などの境地は、とても到達できるどころかそれを想像すること自体不可能なほどで、「一子地」は机上の空論・単なる理

念、単語とすら思えてきます。仏様の境地とはあまりにも程遠い私の現実を実感させられます。でも、阿弥陀様のお徳を仰ぐことによって「あらゆる衆生を一人子のごとく大切にすべきだ。」という理想を、いつも思い返すことができるだけでも大切なことだと言えるでしょう。

すべてのものをわけへだてなく平等に扱うことができないという痛みを味わうところに、手を合わせる生活が始まります。

・・・けり

以上は、一子地の境地を自分が実践するについての話になってしまいました。

それより、立場を変えて「私と衆生」ではなく「阿弥陀様と私」という図式にしてみたほうがわかりやすく、同時にうんと気が楽になります。どういうことかというと——阿弥陀様は平等の覚りを得た方なので当然のことなの

ですが――「阿弥陀様が私を一子のごとく大切にしてくださっている」と気づくことです。

これを究極まで徹底されたのが親鸞聖人で、聖人の語録ともいうべき有名な『歎異鈔』が思い起こされます。その後序（あとがき）に、

聖人のつねの仰せには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、そこばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。」と御述懐候ひし……

《親鸞聖人が常々仰せになったのは、「阿弥陀様が五劫というとてつもなく長い間、深くお考えになってできあがった本願をよくよく考えると、ただただ親鸞ひとりのためだったのだなあ。だから、多くの罪業を持った身であった（私）を、助けようと思い立ってくださった本願のかたじけなさよ。」と、ご心中をお述べになった……》

聖人はいつもご自身を一番低いところに置いておられました。「世の中で

一番どうしようもない、私ほどどうしようもない者でも助けてしまおうと思い立ってくださったのだ。私ほどの者が助かるのだから、助からぬ者はない。阿弥陀様のパワーはそれほどすごいんだ。」と。

私がこう言っても皆さんは「聖人は偉いお方なのに、そんなのはぴんと来ない。」と思われますか。聖人がこういうお方だったからこそ、お念仏が広がり、今に伝えられているのだと思いますよ。

「ひとへに親鸞一人がためなりけり」という有名なくだりの、わけても「けり」というひと言に、聖人がお気づきになった時の深い感動があふれています。

お母ちゃん！

聖人は『浄土和讃』をしめくくる『大勢至菩薩和讃』八首の中にも、一子地について二首をお作りになっています。

超日月光この身には　念仏三昧おしへしむ
十方の如来は衆生を　一子のごとく憐念す

《（大勢至菩薩が仰るには）「超日月光（阿弥陀仏）がこの私に、念仏三昧を教えてくださいました。十方においでになる如来は衆生（生あるもの）を、一人子のように可愛がってくださいます。」と。》

子の母をおもふがごとくにて　衆生仏を憶すれば
現前当来とほからず　如来を拝見うたがはず

《子供が母親を思うように、衆生が仏を心に念ずる（念仏）ので、現在も将来も（お浄土で）如来を拝んで見ることができるのです。》

この二首目では、さっきと反対に私の方から阿弥陀様に向かっての関係が説かれています。

私がいつも「信心とは阿弥陀様に惚れることだ。」と言うのもこれと同じことで、「衆生が念仏するのは、子供が母親をしたうのと同じだ。」と説かれ

ています。私たちが阿弥陀様に向かって「南無阿弥陀仏」と称えるのは、子供が母親に向かって「お母ちゃん」と呼ぶのと同じだということです。

「お母ちゃん」は、母親が子供を大切にするのに対して、子供が答える言葉でもあります。お念仏も同じように考えることができます。「南無阿弥陀仏」は、私を一子のように大切にしてくださる阿弥陀様に対するお返事なのです。

私たちは「南無阿弥陀仏」ともいい「ナンマンダブツ」ともいいますが、さしあたり、「南無阿弥陀仏」と称えるのは「お母様」、「ナンマンダブツ」というのは「おかあちゃん」といったところでしょうか。ママというところもあります。私のところでは「おたあさん」。小さい頃は「おたあちゃん」と呼んでおりました。

どのような呼び方でも、自分の慣れた呼び方をしたとき、それが母親だという実感がわきます。「南無阿弥陀仏」でも「ナンマンダブツ」でも、称え

慣れた称え方がその人の阿弥陀様です。

はじめに、どの母親も自分の子供は大切にするけれど、よその子供には同じようなわけにはいかないと申しました。私の母親もたぶん例外ではなかったでしょう。私を最後に六人の子供を産み、育てました。ここに姉もおりますが、こんな大変なの――私のこと――を六人も育てました。もちろん阿弥陀様と比べるわけにはいきませんが、「たった六人。でも六人。」です。一人でも大変なのに、やはり六人は大変です。

十三回忌に当たって、母を褒(ほ)めたような貶(けな)したようなお話を聞いていただきました。

読者の頁

感想 意見

滋賀県草津市　高谷　定道さん

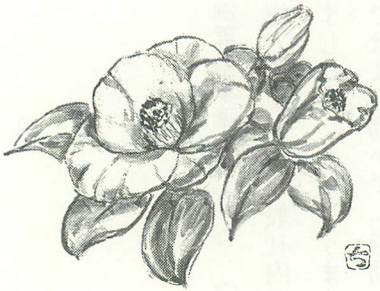
平易に書かれ仏教を全く知らぬ私にもよく理解できます。今般社内の教育というよりしつけ運動の一つとして5S運動を始めましたが、あまりうまく行っていません。西洋風では理論的に正しくとも「正」では人心動かず「感動」がないと動かぬようです。『みめぐみの』は参考になります。

大阪市　深田　英雄さん

あみだ様のお救いのお心を、わかり易く、幅広くお説き頂き、本当に有り難いご説法と喜んで拝読させて頂きました。

難しいお話より、一般の人々（私にも）に解り易いご教化を今後もお願い致します。

いよいよのご教化・ご活躍を期待申し上げます。



あとがき

みめぐみの刊行委員会

昨年十一月に営まれた歌徳院様（大谷智子前裏方）十三回忌法要の時のお話・二話をまとめて下さいました。皆様の中には当日法要に参座され、また、貴重なご遺品の品々に胸打たれた方が多くおられることと存じます。

今回も日常における我々の〝心の動き〟を鋭く言い当て、たとえ分かったとしてもなかなか実行出来ない事柄でも、阿弥陀様の手のひらの上にある自分に気付くところから精進は始まるのだ、とそのきっかけをご自身を例にとってお話下さいました。

また二話目では、「お母ちゃん」と呼ぶ日常何気ない一場面にも、お念仏の入口があるのだと教えて下さいました。

読者の皆様も御親教だからと形式張らず、自然な形で日常生活に活かしながら、『みめぐみの』の輪を広げて下さるよう、まずは身近な方々にお薦め下れば幸いです。

みめぐみの　第15部

2002年３月５日　印刷
2002年３月10日　発行

定価 200円

著　者　大谷光道

発　行　みめぐみの刊行委員会
〒600-8167 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754
本願寺寺務所内
TEL.075(351)3555　FAX.075(351)3120
振替口座　01060-5-56990

印　刷　㈱中外日報社

みめぐみの刊行委員会刊